

九月作品



月集スバル

表にはないみずいろが見えているくらいくつしたべろりと脱ぐ
Wheat は小麦、Baleys は大麦と教えてるけどよくわからない
二羽ふんと言わず二本と言ってお砂糖ずりと言ひ砂糖肝と言う
ハンカチ 田宮朋子 新潟

夢のなか夢としらずにワイン注ぐ機嫌よろしき宮夫人へと
お借りしてお返ししたるハンカチが宮英子さんの形見として在る
三鷹より電話がありて富山へと飛びしことありシルクロード展
しめやかな梅雨の夜なり二つほど宮英子さんに詫び申したき
赤き薔薇挿しおく夜のリビングでショパンの幻想即興曲聴く

風の馬 清水正子 神奈川

地球はいま終りの始まり コロナ禍のさなか空爆の黒煙あがる
「ガザ停戦」破らるるためにあるごとし空爆で逝きし子らは帰らず
イスラムをユダヤをおもひ人をおもふ一神教のしぼりなき身に
干し物がタルチョのやうに靡く日よ祈りを運ぶ風の馬おむ
野菜売りの荷車をひくロバがゐる薄氷うすこりの日常もどる

☆今月の四人☆ (小島ゆかり選)

見ているだけだ 奥村晃 作*東京

理不尽の虐殺続くミャンマーを見ているだけだキミもワタシも
恐ろしく見ていられない国軍の兵ら青年を打ち蹴り撃ちぬ
インドシナで数百万のコミュニニストが虐殺された事知らなんだ
〈独裁〉や〈虐殺〉容認するようなりリーダーをなぜ放逐できぬ
共産主義バーサス自由民主主義の構図・抗争まだ続くのか

みずいろ 大松達知*東京

読むべきを読めずに風を見ていたりゆたかさはただほんやりとして
攻めるとか守るとかいう風合いの、今日の授業は攻めた疲れた

☆ ☆



高野 公彦 千葉

好きな子を忘れたいとき逆立ちの練習したり少年われは
逆立ちをして両手もて歩くとき地球の巨大なること知りき
コロナ下の未明しげし現責めさるるごとくに覚めぬて独り
君の遺著『樹木と命』書棚より我を見てをり没後三ヶ月
酒に酔ひ会話楽しむそのときも黒眼澄みぬし栗坪先生

水島 晴子 兵庫

仲 宗角 三重

生身なるを思ひ知れよとばかりにて腰痛つづく朝から昼へ
腰痛むを恠へて歩み点したるあかり淡くて何せむわれか
きつと迎へに行くからと言ひさめざめと母は泣きけり裏戸に立ちて
家出づる悲しみ募りせき上ぐる涙のすぢが頬をつたひき
居候われをともし夕川に網打ちにけり壯齡の叔父

杜 沢 光一郎 埼玉

森 重 香代子 山口

字が読めぬルーペで文字をさがせどもレンズのむかうでゆらめくばかり
高齢者からのワクチン接種始まりぬ肩めくり上げずふりと注さる
こんな対策がどんな効果をあげるのかと思ふにべもなく右肩あがり
生まれたばかりの象さん耳を肩のあたりにびたりとつけて走りまはれる
瞑想にふけれるハシブトゴイと見せておいて一瞬の間に鯨啞へつ

武 田 弘之 神奈川

日 影 康 子 富山

日章旗掲げる家の見当たらず祝日ばかり増えゆく日本
コロナ禍の最中人らの応募せる紙上歌会によき歌多し
かたくなにカジノ建設進めゆく市長のありて危ふし横浜は
横浜にカジノは要らぬ宮柵二、葛原繁住みましし地ぞ
人生の最終章を迎へたる自覚などなしまだ八十九

昼夜なく水に浸かりて冷たかる折からの陽が橋脚に差す
みづからは見ることのなき椎骨のほの温くして雨となる夕
水分摂取また指示されて帰りゆくみづ欲しながらぬわが老体軀
想起してはならぬかなしみ携へて用心深くわが暮らしをり
蛸蝶あをむらさきに閃きて萩ひとむらをながく離れず
早梅雨の風雨に大きく揺らげども庭の芍薬けなげに散らず
幾年を閉ざししままの経蔵のわき露地の紫陽花濃く彩づきぬ
歌人茂吉の比類なき性格見るおもひ日記あまたの文字の整ひ
大家族の寺に嫁ぎて苦しかりしわが生語らず朝草を引く
訪問入浴・訪問診療くすり配達と多くの人らに夫は生かさる



古屋 祥子 群馬

あれ、これ、と思ひ溢れるを欲張りてその因も果も消えてしまつた歌一首紛失したり机上・机下探して無駄な時間費やす

えにしだを「金雀枝」と書く不可思議さ訝しみつ文字拡大す聴力も視力も薄れ手触りの記憶呼び出しクロスワード嵌む

諳んじてゐたるものみんな忘れ果て「生きる」も忘れて今日も安泰
影山 一男 千葉

古書店はシャッター降ろし神保町靖国通りはもう死んだ街三省堂、書泉のみ客待ちてをり古書店はただ眠れる街に

ピアホール(ランチョン)に来て生ビール飲めぬを買ふランチョボックス文具店(綿華堂)わが同年の三代目主人つひに店閉づ

千円ほど文具買うてはおまけしてくれし神田つ子店主よさらば
桑原 正紀 東京

カーテンを引けばあしたをふる雨が桐の広葉をしづかに濡らす梅雨ごもりコロナごもりの朝明けの小暗し夢のつづきのやうに

平坦に七曜すぎて週末も週明けもなく曇天閉ぢぬ
休み日の安堵、寛ぎよみがへる「日曜美術館」をみてゐて

職退きて六年さても繁忙の日々の杳さや前世のごとく

狩野 一男 東京

七十になつた途端に見るゆめは悪夢ばかりで、夜おそろしもすみやかに五月は去りて鬱のつき六月が来ぬよりどころなし美しい七十代をめざしたが 下級・清貧・無技巧老人

夏至ゆふべ野菜売り場に来て不意に「織江の唄」を思ひ出したるほろびたる花山村をかなしむと山崎ハコの世界にひたる

宮里 信輝 神奈川

ファイザーの mRNA ワクチンを接種す 0.3 ミリリットルざわざわとからだのなかはあやしむもワクチン接種したる数日

二回目の接種は三週間後なりわが身はあくがれ? おそれて? 待つか『宇宙からの帰還』や『臨死体験』の著者立花隆逝きたり

死にてゆく時の思ひや死後の世は如何なり著せ立花隆
岡崎 康行 新潟

白濁のプランクトン満つる海底を平たい紙のやうなからまんゆくとび跳ねて移動もするらし帆立貝流れの揚力に身を預けつつ

海底は深みへ切れて落ちゆけり向かうの岸も底ひも見えずみづからはいつ食はれても是なりといふ環境にありエビもホタテも

にんげんに一箇所在るが不思議なり左右を後ろ手に握れるあたり
小島 ゆかり 東京

六月の雨雲厚しスプーンのくぼみに溜まる夜の物音
雷鳴のとどろく夜をスプーンに舌ふれて金のスープを飲み

スプーンにすくふスプーンに感情もゆれながらくちびるに近づくと
青葉光とつとせつなし車椅子の母のマスクをまたずり上げて

車椅子の母と行くときむかうから亡き父の空の車いす来る

木 畑 紀 子 京 都

鬱うつ春の買ひもの鉢と土とびつくりぐみの若木のみどり
花待てどその気配なし七十二の記念樹びつくりぐみはをさな木
野に立てる夏ぐみの木に熟れ実あり雨後の陽に照る深紅しんくの楯円
何歳のぐみの木ならむ濃みどりの葉あひに実りわが手とどかず
老いの坂くだりゆく逡次わが植ゑしびつくりぐみや花咲きて実れ

島 田 暉 神奈川

わが庭に華やぎ咲ける薔薇の花ある時魔性の女になりぬ
黒服に黒マスクせし男ひとり怪盗ルパンが街を横切る
若者の喧嘩のごとく雲荒れて人の世界に電投げつける
多摩川の曲がるところが輝きてローレライの歌川原にひびく
懊悩のこころのままに眠らむも夜半にとどろく稲妻の音

津 金 規 雄 神奈川

この夕べ百合の白きが萎れ落つ根の国の扉がしづかにひらく
怪しげな言説ふるふ無粋あつとこ漢 詩歌を識らぬわが仮想敵
深山の一樹となりて数百年人に遭はざる世を送りたし
「世捨て人みたいですね」と言ひくれし女人のまなざし鋭くあたか
仰ぎ見る杉の巨木に語り掛く「来世は仲間に入れてほしいな」



小 山 富 紀 子 京 都

想像力豊かと自負し生き来しがコロナ禍の世界想像だにせず
この夜更け眠られぬ人思ひつづわれも眠れぬ人となりゆく
歌の中に遣りし人らを思ふ夜あの人の母御あの人の御子
母を恋ふ友の歌読みわれもまた亡き母の歌詠みたくなりぬ
潮騒の聞こゆるポストにひと夜さを宿りし葉書かもめとなりぬ

小 嶋 一 郎 佐 賀

この朝も天井板の染みひとつ頭上にあふぎ目薬を注す
このところ細目でもものを見る癖に気付かせられて白鷺は飛ぶ
行かざるは一県のみ和歌山を訪ふ用務なし八十五の身に
去年こぞよりも二十日も早き入梅ついでり記事隅に小さしコロナ禍のせぬ
人さまの一語儼みて一首作し結局は棄つ一夜ののちに

後 藤 美 子 北 海 道

ワクチンの集団接種待つ広間黙して坐る若い人の群れ
穏やかにやさしきSTAFF幼子にもいふごとく我らをあつかふ
すなほなる羊のさまに率ゐられ移動すワクチン接種ブースへ
ワクチンは打つが当然うたがひを持たぬことつまりは同調圧力か
ハンパーゲ、蒲焼を通販のカタログに見出す菓もりつづく

福 士 り か 青 森

シャガールの「アレコ」四幕飾りあるホールに立てばここは深海
ほんたうは海を見にゆくはずだつた胸のカモメがしきり鳴くから
四面ぐるり見上げ見回すアレコホール眩暈のための椅子のかたはら
冷静のやうなフキゲン不機嫌のやうなレイセイ逃げの日常
こんじきの葦原のなかに描かかれたるシャガールの鎌鈍く光れり



橘 芳 園 新 潟

「わからねば経ありがたし」利口ぶり言ひしも寺をささふる一人
逆縁の葬りまたあり仏力が生かせるならず死なしむならず
いみじき僧、法師も憂しと親鸞が歎きたるなり七百五十年前
親鸞が自をなげくこと無慚無愧と思ふ日のあり思へぬ日のあり
われ一人救はぬ念仏三万の自死者一人も救はぬ念仏

水 上 比 呂 美 東 京

小僧ではなくてたしかに頭かしらなる風格みせてゐるよわが膝
鹿三頭猿一群れが訪ねくるうぶすなの家母ひとり住む
帰郷かなはぬ人らのために起業すと有限会社「墓守代行」
愛なんて信じないよといふ顔の猫が信じる(ちゅーる)の時間

風 間 博 夫 千 葉

「お湯張りをします」「ご飯が炊けました」すまないねえと応へたくなる
糖質がゼロとふウイスキー魅力 今宵家飲み今宵お湯割り
牛乳のやうに世の中に出回らず豚豚飲みるる母豚の乳
遠くから手を振つてゐるこちらからも手を振つてゐるつながるふたり
右利きが立つ右打席ピッチャーを正面に見て左の打席

田 中 愛 子 埼 玉

「ちんやり」が郷の方言だつたこと今朝の天声人語で知りぬ
岩波の文庫をつつむバラフィンのうす紙やぶれなほ捨てがたし
高いとこに小さきお顔が載つてゐる六尺四寸オオタニサーン
目の前にふいに地がありはつなつの光のなかで転んでゐたり
旧かなで書くときいいつもあぢさゐは雨のなかにてかすか揺れあつ

鈴 木 竹 志 愛 知

引き潮に川辺の杭のあらはれて鵜や青鷺の止り木となる
たまさかに雉子もあらはれ散歩するわれらに興を振る舞ひくるる
三密に無縁な田んぼ道なれどマスクをつける我少数派
常連の中神さんと犬に会ふ散歩のコースを今日も選びぬ
運の良き日ならば遭へるに今日もまた遭ふは適はず鴨の番に

原 賀 環 子 東 京

名誉市民の光をねらふ銃撃か中村哲のアフガンの死は
静脈の浮きでる腕を岬とし手とはつくづくわれのさい果て
路の画はさびしきかなやY字路をあまた描ける横尾忠則
Y字路は腕にもありてわたくしの静脈に棲む横尾ただのり
帰宅してネクタイ解くさびしさを味はふごとく日々はありけり

水上 美季 東京

洗濯もの干された洗濯もの干しは物干し竿にかけられて夏至エクセルのファイルひたすら保存しつつ心のべつ咲かせるアナベルCQDではなけれども公園の四片が見えて吸はれるごと行く急激に降つてにはかに晴れるそら予定がなくて忙(は)しい日曜炎天に乾いた洗濯ものたちは皺ごと凍りしごとくかかはか

大野 英子 福岡

年をとる速さを知れといふごとく花咲き実り梅は太つた新緑のなかにまぎれる梅の実のここにあるよといふ声を待つその昔わたしを支へてほしいままに登らせくれた古木梅の木丁寧(に)枝ごと切つて受けとめる青うめころりと転ばぬやうに年取つて辛いね、ただどありがたうささくれ立つた木肌に触るる

松尾 祥子 東京

左脳より右脳を信じたとき日なり向日葵クワックワツとひらくはつもの黄桃食めば青春の力湧きくる華甲のわれに騙すより騙さるる方を選ばんと思ひつつ食む激辛カレー在宅の人増え他社の内情を窺越しに聞く六月の朝

今日の吾のトゲトゲ思考ああいまだCOVID-19のウィルスのごとし



島田 暉歌集 令和3年6月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

戦あらすな コスモス叢書第1197編 角川書店

著者住所 〒246-0015 横浜市瀬谷区本郷一-14-16

高野公彦歌集 令和3年7月刊 三〇〇〇円(税別) 送料三〇〇円

水の自画像 コスモス叢書第1199編 短歌研究社

著者住所 〒272-0114 千葉県市川市塩焼二-1-21-506

小島ゆかり歌集 令和3年7月刊 三〇〇〇円(税別) 送料三〇〇円

雪麻呂 コスモス叢書第1198編 短歌研究社

著者住所 〒184-0004 東京都小金井市本町六-1-10-W302

松尾祥子歌集 令和3年7月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

橿円軌道 コスモス叢書第1196編 角川書店

著者住所 〒168-0065 東京都杉並区浜田山一-12-1-14